

DRAGON QUEST ダイの大冒険—変異伝—

宮枝嘉助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アルキード王国にある宿屋の息子に生まれた主人公はある日、自分が転生者である事を思い出し、悩んだ末に家族を国ごと救う為に歴史への介入を決意する。

しかしその明くる日の晩、神らしき存在が夢枕に立ち主人公に告げる。その世界は周囲のドラクエ世界の影響を受けて「変異」してしまっており、主人公が何もしなければ、その世界は原作よりも強化されてしまった大魔王バーンによって必ず滅ぼされてしまうと――。

新アニメをきっかけに気長にプロットを組んで書き始めた物語です。ぶつちやけ原作通りの展開はほぼありませんので苦手な方はお戻り下さい。

目次

第1話	アルヴェインの宿屋	1
第2話	凧の時、嵐の時	13
第3話	初陣	23
第4話	太陽と月の姫君達	36

第1話 アルヴィンの宿屋

「いらっしやいませ、旅のお方！ アルヴィンの宿屋へようこそ！ 素泊まりで1晩100ゴールド、朝晩食事付きだと120ゴールドになります！」

「じゃあ食事付きで頼むわ、坊主！」

「はい、毎度あり！ アリス、お客様をお部屋に案内してくれ！」

「はーい、おきやくさま、どうぞ！」

ここは、アルキード王国の中央区に位置するアルヴィンの宿屋。今の時間は夕方のかき入れ時で今日だけで6組のお客様がやって来ていた。

今年で11歳になるアルバートは6歳の頃から宿屋の仕事を手伝っており既に5年になるベテランだ。そしてお客様を部屋に案内していたアリスは彼の妹で、今年で7歳。彼女も6歳から宿屋の仕事を1年間手伝っている。既に小慣れてきている。

彼の父親は宿屋の名前にもなっているアルヴィンで宿屋の料理担当。母親のシャリーは食堂のフロアを切り盛りしている。それから、掃除洗濯をするスタッフが日替わりで5名。以上がアルヴィンの宿屋の布陣だ。

「お疲れ様、アリス」

「お兄ちゃん、おつかれさま。今日はおきやくさん多いね」

「そうだな、今の人で満室になっちゃったし、俺達も母を手伝いに行こうか」

「うん！」

先程のお客様を部屋に案内して満室になってしまったので、アルバートは満室御礼の立て札をフロントに立ててから母親のシャリーが切り盛りしているであろう食堂へと向かう。今日は満室になる程のお客様の人数なのだ、さぞかし食堂も忙しいに違いない。

そう思って妹のアリスと共に食堂に向かおうとした、その時であった。

「——!! つぐ、が、あぁっ——!!」

「!? お兄ちゃん、どうしたの!?」

「頭が、痛、ああああ!!」

「お兄ちゃん!? お兄ちゃああああああん!!」

アルバートの頭に、頭蓋骨を万力で締め付けられ、更に脳を直接ほじくり回されているかと思えてしまうような激痛が走る。とてもじゃないが立っていられず頭を押さえながら倒れて痛みにのたうち回るアルバート。

そんな突然の状況に慌てふためくアリス。誰かを呼ぶという事すら思いつけないまま、時間だけがいたずらに過ぎていく。

「どうしたアリス、凄い音が……って、アルバート!? 大丈夫か!? しっかりしろ!」

騒音を聞きつけたアルヴィンが駆け付けるが、医者ではないアルヴィンではアルバートの身に何が起こったのか見当もつかない。出来る事といえば息子の体を抱きかかえて部屋に連れて行き、ベッドに寝かせてやる事だけであった。

「どう、ですか? 息子は助かるんですか!?!」

「申し訳ありません。薬草もダメ、毒消し草もダメ、回復呪文や解毒呪文もダメとなると、私では手の施しようが……」

「そんな……アルバート……ああ、神様、どうかわたし達の息子をお救い下さい……!」

「お兄ちゃん、死なないで！ お兄ちゃん!!」

「……は……？」

目が覚めるとそこは俺の部屋のベッドの上だった。脇腹に重みを感じたので見るとそこには妹の可愛い寝顔。

体を起こしてみるが、意識を失う前に襲われていたあのとんでもない頭痛が嘘のように頭がすつきりとしている。すつきりし過ぎてワンプンマンのようにハゲてしまったのかと一瞬思ってしまったって頭を触るが髪はある。何ともない。

……うん？ ワンプンマン？ 俺は一体何を、思っ、て、……あ、あ、あ、あ……！ 思い、出した……！ 俺は……うん、誰だ？ いやいや、俺はアルバートだ。それは勿論解っている。いやそうじゃない。俺には前世が……ある、ハズ……だが、ダメだ、ほとんど思い出せない。何だこれ、転生モノの癖に記憶に不備があるとか責任者出せよこの野郎。こういうのは大体神様が……って、待て。待て待て。……は……アルキード王国のアルヴィンの宿屋……アルキード王国……っ

てダイの大冒険に出て来る国名じゃなかったか!?

そういえば食堂を手伝っている時に聞こえたお客様方の雑談の中でソアラ姫が何歳になってお美しくなられただの、魔王ハドラーがどこそこに攻め入っただのって感じの事を喋っていたような気がするぞ!?

うわあ……もう間違い無いわ……ダイの大冒険の世界だわ……しかも超やべー国に転生しちゃったわ……よりもよって本編開始前に亡くなる国に転生とか無いわ……

「いやでも、まだ宿屋の客からバランの名前は出ていない。というかまだハドラーも倒されてないっぽい。だったらまだ逃げようが——」
逃げようはある。この国を出るだけで解決だ。でもどうやって逃げる？ 俺1人で？ こんな可愛い妹を放っておいて？ なら2人で？ いや、それを言ったらあんなに必死に看病してくれた父さんや母さんだって死んで欲しくない。なら家族4人でか？ いやいや、そんな事言い出したらこの国の皆だって別に死んで欲しい訳じゃない。なら、国の兵士達を止める？ それでもし処刑を止められずにソアラ様が死んだら暴走確定なバランを止める？ あの公式チートキャラを？

仮にバランの処刑イベントを、例えば最初からバランがすっかり国に受け入れられるような感じにしてどうにか止められたとしよう。それが出来たとするとソアラ様が死なくなる訳だが、もしそうなるとダイ……いや、デイーノ王子はもしかするとアルキード王国でそのまま育つ事になる、のか？

という事は勇者ダイはただのデイーノ王子になってしまつてデルムリン島で育つ事も無いだろうし、そしたらもしかしたらアバンとダイは出会わなくなつてしまつてダイは強くなれずに大魔王バーンを倒せなくなるかもしれない。いや、それもどうなんだ？ むしろ竜の騎士であるバランが鍛えた方が強くなつたりするのか？ いや、確かバランがダイと戦った時に驚いてたからその可能性は低いかな？ というかあの物語、特にバラン戦の辺りから1個でも成長フラグが折れてたら詰んでた戦いばつかった気がするから下手な事が出来んの

ですが……。

それを考えると、例えば俺達家族だけが上手い事アルキード王国を脱出出来たとして、たったそれだけでもとんでもないバタフライエフエクトが起こってダイ達の成長フラグのどれかをへし折ってしまいかもしれない。もしそんな事になったら地上は大魔王バーンに消し飛ばされてしまう。そんな事になったら目も当てられない。

なら、未来を知ってるなんていう特級の異物の俺は下手な事をしない方がいいとしか思えない。国ごと吹き飛ばすような滅ぼし方なら苦しみななんて感じる暇も無いだろうし、……いや、勿論死にたくなんてない。だけど俺が下手な事をした所為で地上そのものが消し飛ぶなんていう責任が取れるとも思えない。だったら――

「……やっぱりダイ達の成長の為に、下手な事しないでそのまま――」

「――ん、お兄ちゃん……死んじやイヤ――」

我がマイエンジェル（二重表現）アリスちゃんの切ない寝言を聞いた俺の身に電流が走る。

ええい、ごちゃごちゃ考えるのは止めだ！　まずは処刑イベントが起きてもどうにか出来るように強くなる！　そしてこの国が滅ぶのを止める！　それで起こる影響は俺が原作知識を使って何とかする！　こんなに可愛い妹を悲しませる鬱展開なんてクソ喰らえだ！

そんな決意を込めながら俺がアリスの頭を撫でると、もう夜中なのにも関わらずアリスが飛び起きた。

「――っ！　お兄ちゃん!?　大丈夫!?!」

「アリス、大丈夫だ。頭痛いのはもう治ったよ」

「もうっってお兄ちゃん、3日もねてたんだよ!?!　本当に大丈夫なの!?!」

「……マジで?」

「アルバート！　目が覚めたのか!」

「ああっ、目が覚めたのね……本当に良かった……!」

「……マジか」

アリスの声を聞きつけたのか、父さんと母さんが部屋に飛び込んで

来た。2人の反応からしても、どうやら俺が3日も寝込んでいたのは本当らしい。

それから俺は医者と呼ばれてもう大丈夫だという太鼓判を押してもらうまでベッドから出させてもらえなかった。いや、気持ちは嬉しいけど、もう少し……ねえ？

それから俺は、急に修業を始める為のベタな言い訳として、寝込んでる間に神様が夢枕に立って勇者になりなさいと言われたんだと主張して両親を説得したんだが、何故かアリスも一緒に修業すると言い出した。

それは流石に母さんが止めるかと思って様子を見てたら、母さんがアリスにお兄ちゃんが無茶しないように見張っててと言いついて聞かせてた。解せぬ。

「それはアルよ、おぬしの事が心配なのだろうよ」

「そうっすよアル兄、あの時はオレたちだっつてしんぱいしたんスから」
「モーゼス、シーザー、お前ら……！」

そんなような事を2人の友人に話すと、全く同じ意見がノータイムで返って来た。

エラく老成した落ち着いた喋り方をしている方がモーゼス。14歳で俺の3つ上の兄貴のような存在だ。

それから逆に軽い喋り方をしている方がシーザー。こっちは8歳で弟みたいなモノだ。

ちなみにアルってのは俺の愛称である。アルバートだどちよつと長く感じるからね、しようがないね。

「むう〜！ わたしが1ばんしんぱいしたんだもん！ お兄ちゃんホントに死んじゃうかと思ったんだから！」

「分かった分かった、アリス。お前がナンバーワンだ」
「えへへ〜1ばんだあ〜」

やだ、何この生き物めっちゃ可愛いわ。

こんな可愛い妹をいつの日か嫁に出さねばならんのかと思うと早くも悲しくなってしまうな。自分が転生者で今の家族を本当の意味で家族として見れない事を自覚してしまっている所為か、今はまだいいとしても将来絶対美人になるであろうアリスの事を女の子として見ちゃわずに家族として扱い続けられるのか、正直不安である。

そんな風のアリスちゃんの可愛さに萌え萌えしていると、友人2人組に話し掛けられた。

「それでアルよ、おぬしが寝込んでおった時に夢枕に神様が現れたと言っておったが？」

「ああ、俺に地上の危機に備え勇者になりなさいって」

「アル兄すげーっス！　じゃあアル兄が魔王ハドラーをやっつけるんスね！」

「いや、それはどうなんだろうな？　今活躍してるカール王国のアバンって人じゃ魔王ハドラーに勝てないっていうのかね？」

「む？　アルよ、何を考えておる？」

さて、正直俺1人で修業するとか、そんなストイックなモチベーションが保てるとは到底思えないので2人にも俺の修業に付き合っ
て欲しいと思う。

そもそもハドラーが居るって事は本編開始はまだ15年以上先の話だ。自分がバーンと戦う事になるかはこれから修業してどこまで強くなれるのか全く分からないから何とも言えないが、アルキード王国の滅亡を回避するつもりなら自分がダイの代わりにバーンと戦う羽目になる可能性も考慮に入れて必死に修業し続けなきゃならないだろう。ダイ達のように3ヶ月程度であんな化け物みたいな成長が出来るなんて甘い考えはとてもしゃないが持てないので、何とかモチベを保って本編開始の時間軸まで修業し続けないと。

となると打倒ハドラーが目標では、ハドラーをアバンが倒してしまっただ後でモチベが保てなくなってしまう。その為には――

「なあ、魔王ハドラーってどこから来たと思う？」

「言われてみれば聞いた事が無いな。……いや、考えた事すら無いと

いった方が正しいか」

「何言ってるんすか、魔王といえば魔界！ そんなの昔からおとぎ話で決まってるじゃないすか！」

「そうだな、まあ本人に訊いた訳じゃないから确实じゃないが、魔界だとして。じゃあシーザー、その魔界って所は魔王ハドラーしか居ないと思うか？」

「え？ いや、分かんないっす」

「魔界というぐらいだ、当然他にも魔族やモンスター達が蔓延っている事だろう……ふむ、そういう事か」

「どういう事なんすかゼス兄？」

「お兄ちゃん、どういうこと？」

流石に今の俺より年上のモーゼスはピンと来たようだ。シーザーとアリスは何の事やらって感じかな？

ちなみにゼス兄ってのはシーザーだけが呼んでるモーゼスの愛称である。しかしゼスか……別に呼びにくくはないし、俺も真似しようかしら？

「魔王ハドラーの次に来る魔王に備えよ。そういう事だな？ アルよ」

「肯定。……ああ、神様が言ってたのは多分そういう事なんじゃないかと思うんだ。それか、今戦ってる魔王のハドラーがカール王国の勇者アバンだけじゃ手に負えなくなるのかもしれないけど」

「そっか、いろんなお話にまおうやゆうしやさまが出て来るもんね」

いかんいかん、アルって呼ばれた所為で思わずネタに走ってしまった。全く伝わる訳無いんだから滑るに決まってるのに……ああ恥ずかしい。

ただ、アバンとハドラーの戦いに介入する事になるかは正直分からん。地底魔城の最終決戦の時までに俺達がどのぐらいの強さになれるかが問題だ。

でも、もし介入出来るぐらい強くなれたなら、もしかしたら騎士バルトスと騎士を助けられるかもしれない。いや、ロカの方は正直いつ死んだのか分からんから最終決戦の時に既に死んでるのかもしれないが、少なく

ともヒュンケルの父親であるバルトスはどうかしてやりたい。ミストバーンに育てられなくなるともしかしたらヒュンケルが暗黒闘気を使えなくなつて原作より弱くなるのかもしれないけど、アバンとバルトスで鍛えれば何とかなるんじゃないだろうか？ それか、2人を助ける力が無くても最悪ヒュンケルをバルトスの死に目に会わせてそのついでにハドラーから『魔界の神』の名前と『13年』の単語は聞き出してアバンに伝えておきたい。

何も知らなくてもあんなに強い弟子を育てていたアバンの事、この2つの単語を伝える事が出来ればきつと入念に準備してくれるハズだ。

そうして周りを説得して修業を始める事にした初日の夜。俺は謎の空間の中に居た。右往左往している俺の目の前に、ゴメちゃんを超でっかくして更に王冠を被せたような……ゴールデンメタルキングスライム？ とでも呼びびそうなのが居た。……何て呼ぶんだらう……略すと同じゴメになるから……ゴメ様？

「ここはキミの夢の中だよ、アルバート君。故に、キミがイメージする神の姿を取ったハズなんだけど……何、これ？ こんな姿がキミの思う神なのかい？」

「え？ あれ？ 何でだろう？ アレかな？ ゴメちゃんが本当は神の涙だつていうから、その親として想像したらでっかいゴメちゃんになるかなつて感じで」

「いやいや、キミはアレが神の涙そのものの姿じゃない事を知ってるでしょうよ。まあいいや、事情を説明するだけだから姿はどうでも」

「え？ 説明あるの？ この手の転生って何の理由も無いご都合主義がほとんどだから何の説明も無いのが普通だと思ってた」

「どこの常識を言ってるんだキミは？ 創作物と現実をごっちゃにし過ぎじゃないかい？」

「いやだってダイの大冒険自体創作物じゃん」

「まあ、そうだね。ただそれが、ただの創作物じゃなくなっちゃったのが問題なんだ」

「……はい？」

この後のゴメ様（仮称）の説明は正直小難し過ぎてよく分からなかった。

まず、何だかドラクエ世界そのものが宇宙規模のバカでかい世界樹の中に内包されていて、その無数の枝の中にまた無数の世界がある。

その内の1つの枝の中がロトシリーズだったり、別の枝の中が天空シリーズだったり、そのまた別の枝がモンスターズシリーズだったりして、そういう風に分かれている枝の1つにダイの大冒険の世界があるんだそう。何か他にもロトの紋章シリーズの枝とかスライム冒険記の枝とか色々あるらしいけど、……っていかんいかん、流石に脱線し過ぎた。

それで話を戻すと、その枝葉同士が近付いてしまうと影響を受けて世界が変異してしまう事があるんだと。

「えくと……枝葉を近付けるってのはつまり、俺達の世界でコラボイベントとかやってる所為で世界同士が近付き過ぎて影響を受けて変異しちゃったって事か？」

「そういう事だね。他にもその世界独自の技や呪文を他の世界で再現された時なんかもそうかな」

「いやいや、んなアホみたいな理由で世界が変わるとか信じられるかいな。そんな事言ったら何か？ その内モンスターやパズドラの影響を受けた変なダイの大冒険でも始まったりすんのか？」

「いや、それは流石に世界樹の幹からして別物だから影響を受ける事は無いよ。でも同じ幹の中の世界同士は実際にそれで変異しているし、その所為でこの世界は枯れようとしているんだから」

「……は？ 枯れる？」

枯れると聞いて俺は思わず、ダイの大冒険の世界が廃れて枯れる光景を想像してしまった。だが、正直それはおかしい。原作は5千万部近く売り上げ、後世のドラクエシリーズに多大な影響を与えている超名作がそんな事になるとはとても思えない。

「枯れると言っても、今キミがイメージしたような枯れ方じゃないよ。変異した所為で大魔王バーンが強くなり過ぎてどう足掻いても勝てなくなっちゃったのさ」

「え、は？ それは、どういう……」

「キミが何もしなければ、ダイ達は1回目のバーン戦で超魔生物ハドラー諸共全滅し、地上は消滅する」

「………何………だ………」

「今のは冗談ではない………本当だ………」

「という訳で話は聞かせてもらった！ この地上は消滅する！」

「な、なんだって〜!? ……という訳さ」

意外とノリがいいなこのゴメ様。

って、いやいやそれどころじゃねえよ。原作のあの完璧に近いバランスで出来たストーリーに対して余計な事したらダメどころか、逆に余計な事をして原作以上に皆を強くしないと勝てなくなつて詰むとかどんな鬼畜ゲーやねん。ってか原作^{アレ}以上にダイ達を強くするとか出来るのか？

「それにこれは大魔王バーンも知らない事なんだけど、あの世界を世界樹視点でいうと葉っぱの表側が天界で魔界が裏側、地上は葉脈の部分に当たる。だから地上はあの世界で最も重要な部分を担っているから、消滅させると魔界も天界も消滅してあの世界そのものが消えてしまうからね。まあ、とにかく頼むよ。その為に根幹世界からキミを呼んだんだ。修業さえすれば何でも出来るようになる子に転生させるといだから頑張つて鍛えてね〜」

「は？ いや、ちよ、待っ——」

今何かサラツととんでもない事言つて——

「——っ！ はあっ、はあっ、……はあ、嘘だろ？ 本当に神様が夢枕に立った上で、俺が何もしなければ世界が滅ぶ超ベリーハードモードのダイの大冒険とか、鬼畜にも程がある……！」

正直フラグ管理とかの難易度が鬼畜過ぎて何をしたらいいかわからんだけど、何もしなければ滅ぶしかないと言われると、もう開き直つてがむしやらに頑張るしかないと思えてくる。

そんな訳で俺は、妹達を巻き込みつつも必死に修業に打ち込む事にしたのであった……。

第2話 風の時、嵐の時

あの後1年ぐらいたった辺りで、突然周囲のモンスター達が大人しくなったという話を聞いた。それを聞いた俺は最初、もう魔王ハドラーが勇者アバンに倒されてしまい、地底魔城の決戦への介入は無理だったのかと思ったんだが、ふと俺は気付いた。

前世の記憶を刷り込まれる前、魔王ハドラーが現れてモンスター達が凶暴化したという話は1度しか聞いていない。

ならば答えは1つ。今は勇者アバンが凍れる時間ときの秘法を使った時の束の間の平和の期間だ。という事は、原作でいう本編開始までの時点で後17年。つまり、俺の最初の目標である地底魔城の決戦への介入まで後2年だ。

それまでにやらなきゃならない事をまとめてみる。

1. 地底魔城に入れる強さを身に付ける。
 2. パプニカ王国に入国出来るようにする。
 3. アルキード王国から旅立てるようにする。
- 達成しないといけないのはこの3つだろうか。

順位が逆のように見えるかもしれないが、これは優先順位だ。まずは地底魔城に入っても戦い抜けるであろう強さを身に付けない事には話にならない。2と3は、ただ単にきちんと筋を通すのならば話で、最悪の場合は勝手に出入りするつもりだから達成出来なくても構わないんだけど。

それで1の進捗状況についてだが……。

修業する事に決めてからすぐ皆でアルキード城に行って呪文の契約をさせてもらった。戦時中で少しでも戦力が欲しかったのか、思ってた以上にあっさり契約させてくれた。

その契約の時に実感したんだが、ゴメ様が言ってた事はあながちデタラメじゃなかったのか、俺は本当に全ての呪文が契約出来た。

ちなみにアリスはメラ系とギラ系とイオ系と補助系と回復系はほぼ全部出来たし、シーザーはヒヤド系とバギ系は全部で他は極一部で、モーゼスは……不思議過ぎる。ダメ元だったのもあるけど全員取

り敢えず全部試したから偶然判ったんだけど、モーゼスはギガデインも含めて全部最上位呪文しか契約出来なかった。いや最上位だけってどういう事よ、物語終盤で加入する即戦力キャラなの？ 訳が分からないよ。

　　「というか普通にライデインやギガデインの契約陣があつたんだけど、どういう事なの？ アレって伝説の呪文なのとちゃうの？」と思わず管理してる神官さんに訊いちゃったけど、逆にライデインやギガデインまで契約出来た事に驚かれただけだった。

　　「……って、あ、そうか。そういうえばダイはデルムリン島でブラス爺ちゃんに沢山の呪文を契約させられたって言ってたっけか。その時も普通にライデインやギガデインまで契約出来たって事なんだろうな。……あゝ……もしかしたらそれでブラス爺ちゃんはダイが凄い魔法使いになれると思つて余計に期待しちゃったのかな？」

　　にしても、人間である俺やモーゼスにデイン系の契約が出来た事自体が謎だ。アレって竜ドラゴンの騎士専用の呪文じゃなかったのか？ 大体ブラス爺ちゃんもデイン系の契約陣知つてたつて事になるけど、竜ドラゴンの騎士専用の呪文にしてはデイン系の契約陣出回り過ぎじゃないです？

　　「……いや、逆に考えなきゃダメか。竜ドラゴンの騎士ですら契約しないと呪文は使えないんだと。だから将来自分と同類が再臨した時にデイン系が使えなきゃ困るから契約陣を世界中に残した。そう考えた方が辻褄が合いそうだ。」

　　「それかそもそも前提が間違つてるのか？ 竜ドラゴンの騎士専用なのは実は竜ドラゴン闘ドラゴン気ドラゴンだけで、ただの人間にもデイン系の契約が出来た者が過去には居たんだろうか。原作の印象だと竜ドラゴンの騎士が降臨するのは少なくとも魔王ハドラーよりヤバい奴が現れた時に限られそうな感じだったし、ハドラーレベルの危機の時にデイン系を操つた人間の勇者つていうのも居たのかもしれない。」

　　「まあ、考えても答えが出る訳じゃないんだけどね、これもゴメ様が言う『変異』の影響なのかもしれんし。本家ドラクエの勇者達の影響で、この世界でもただの人間がデイン系を契約出来るようになって」

たつていう。ん？ 待てよ？ ……って事は、もしかして——
「バギー！ おお、これは…：…うう、く、くそつ、うわあつ！ ダメか、いやでもこの感じは…：…」

もしかしたら魔法剣も出来るんじゃないかと思って試してみたけど、ダメだった。ただ、何となく手応えを感じた。頑張つて練習したら出来そうな気がする。

これもどうなんだろうな？ 作中では竜ドラゴンの騎士しか使わなかったけど、人間でも剣と魔法を両方使いこなしてかつ同時に使う技術があれば使えたんだろうか？

勇者アバンは両方使つてたけど同時には使つてなかった。でもマアムの閃華裂光拳は打撃と同時にホイミを使うから、攻撃と魔法の同時利用は絶対に不可能って訳じゃないようにも思える。

第一、ダイが魔法剣を初めて使った時はまだ竜ドラゴニックオーラ闘気を使つてなかったように思う。ならば練習さえすれば使えそうな気がする。

後は今挑戦してみて感じた事だが、ただ単に剣にバギを当てると剣に対してバギの真空の刃が暴れ回つてしまい、持ち手に凄まじい衝撃が来てとてもじゃないが持つていられなかった。

…：…だから、普通の闘気でもいいから剣に闘気を通して保護した状態で魔法を纏わせる。つまり闘気と魔法の同時利用さえ出来れば魔法剣は使えるんじゃないか？ いや、むしろ闘気と魔法を同時利用する技術そのものこそが魔法剣なんじゃないだろうか。

勇者アバンについては、彼の性格を考えるとアバンストラッシュと無刀陣が完成した瞬間に一刻も早く平和を取り戻す為にハドラーを倒しに行つて、その後は平和になつてしまつてそれ以上の力を求めなかつたとかでただ思い付かなかつただけなのかもしれない。それに勇者アバンは確か、結局ダイが魔法剣を使う所を1度も見た事が無かつた気がするし。だから案外、勇者アバンなら練習さえすれば使えたかとも思う。

それと、もしかしたら魔法剣を修得出来たかもしれないキャラと言えば北の勇者ノヴァ。彼にも可能性はあつたように思う。もしも、ハドラー親衛騎団にノヴァがリベンジを挑む機会があつたとしたら、オ

リハルコンを一瞬でも凍らせられるかもしれないマヒヤドを魔法剣にしたノーザングランブレードを編み出してオリハルコン兵を粉々に砕いてみせる……みたいな活躍があったりしたかも。って言っても親衛騎団以外の相手だと効果を実感するのが難しいけどね。それ以外のオリハルコンの敵と言えばマキシマムだけど、あいつ程度だと普通のノーザングランブレードでも倒せそうだし。

——とまあ色々考えてみたけど、これもただ単に“変異”の影響かもしれない。本家ドラクエで魔法剣が出たのはダイの大冒険の後だし、ゴメ様が技や呪文が再現されるのも枝葉が近付いて“変異”する原因になるとか言ってたしな。

話が脱線しまくったが、この1年で俺達は契約出来た下級呪文は一通り使えるようになったし、近接戦闘については城の門番達に付き合ってもらって割といい勝負が出来るようになっていた。というか8歳のアリスと9歳のシーザーも門番の皆様といい勝負するんだけど強過ぎじゃありません？ ……ああ、いや、もっと年下でギガディンやイオナズン使ってたやべー子達が本家ドラクエに居たなそういえば。

気を取り直して後2年。出来れば中級呪文ぐらいまで使えるようになっていたいし、これからも頑張って鍛えるぞい。

アルバートが転生を自覚したあの日から2年余りの歳月が経過した。その時間軸は、本来の歴史で言うならば勇者アバンの冒険の第2部が始まるタイミング。

つまり、凍れる時間が溶け出し、動き出す時。

その時、時間が凍っていた反動でもあったかのように時代の流れはうねり出し、アルバートの意志とは裏腹に、彼の歴史への介入が始まる――。

ここは、アルキード王国から南西部の海岸に向かって敷かれている街道。

その街道はアルキード王国にとって海鮮物を仕入れる為の非常に重要な街道であり、馬車が5台横並びになっても走れる程幅広くしっかりと整備されている。

そんな道を走る5台の馬車があった。ただし、その走り方はサイコロの5の目の並びのようであり、その上中央の馬車は他の4台よりも頑丈そうな造りをしていた。

それが意味する所は想像に難くない。その馬車に乗っている者はつまり――

「――今回の視察は次に向かう漁村が最後です」

「ええ、分かりました。どの村も以前まで凶暴化していたモンスター達の所為で荒れていましたね……」

「そうですね、モンスター共が大人しくなってからもう1年が経ちますが、派手に壊されてしまった家等はまだ復旧の目処が立っていません」

1番頑丈な馬車の中で、文官らしき白髪の初老の男と秘書官らしき妙齢の女性が、向かい側に座る男女の内の女性の方に報告をしている。

女性の方は緑がかかった黒髪のショートボブの髪型に、目鼻立ちも理想的と言ってもいい程に整っている美少女。年の頃は10代前半ぐらいだろうか、思春期真っ只中で未だ発展途上であろうが、既に身体の各所に女性らしい丸みを感じさせる。加えて身に纏っているローブには上質な絹が使われているのが傍目でも分かり、高貴な身分の者である事を窺わせる。

一方の男性の方は緑色の髪した20代半ばぐらいに見える偉丈夫で、隣の美少女を守護する騎士といった出で立ちだ。

「貴女にこう言うてはいけないとは思いますが、去年平和になった時にソアラ様から発せられた『共栄共存の宣言』は間――」

「――止しなさい、エリック。私の近衛騎士の貴方と言えど、それ以上を口にしたなら罰しなければなりません」

「はっ」

美少女がぴしやりと言いつつ。それだけでエリックは黙り込んでしまった。

「……これは独り言だけれど」

「はっ」

「いや返事をしてはダメでしょう独り言なのですから」

「はっ」

「はあ……まあいいわ。ソアラ姉様は、誰に対しても平等に優しく手を差し伸べられる、この国の陽だまり。その平等な精神はモンスターに対しても適用されていて、必要以上の殺生をして欲しくないと考えているの。だからね、私はこう考えているの。ソアラ姉様の言葉を実現する為に私達と共存共栄出来ないモンスターは排除する必要があると、ね」

「姫様、それは……!」

アルキード王国のソアラ王女を「姉様」と呼び、また文官の者からは「姫様」と呼ばれる身分の少女。ソアラ王女の妹君だと思われる美少女から発せられた不穏な言葉に、文官の初老の男が思わず声を洩らしてしまふ。

しかしそう思われる事は承知の上だったのか、文官の反応を意に介さずに彼女の独り言は続く。

「ソアラ姉様の思想はとても立派で素晴らしい事だと思わね。けれども理想論が過ぎるのも確か。なら、太陽にソアラ準えて名付けられた月わたくしは、太陽の光を受けて輝く月のように、姉様の理想を受けてそれを現実的なモノにする為に生きるべきだと思うの。だから姉様より私が視察に出る事が増えると思うけど頑張っつてね、エリック」

「はっ。……は？ 私が戦うのですか!? 私1人ではあばれザルを1対1で倒すのがやつとですよ!?!」

「……エリック、頑張っつて♡」

「いやその仕草は大変可愛らしいですが、どんだけ可愛く言われても私1人では無理ですよ!?!」

姫様の近衛騎士エリック、魂の叫び。ツッコミ

瞳を潤ませて小首を傾げながら上目遣いであざとくお強請りする姿はとても可愛らしいが、エリックの言う通りとてもじゃないがモンスター達を彼1人で相手取るのは無理であろう。

エリック本人が言っていたが、姫の護衛に付く程の手練の兵士でようやくあばれザルと1対1なのだ。最強と謳われるカール王国の騎士達ならともかく、アルキード王国の兵士の練度ではあばれザルを1体倒すのに2人、無傷で倒すなら3人は必要だ。その上、この世界におけるあばれザルは少なくとも5体以上の群れを成す事が多く、それらを討伐する場合は20〜30人の兵士が動員される。

勿論、彼女もそれを理解していない訳ではなく、姉のソアラ王女が宣言した無茶に対する自分の毒舌を誤魔化す為の冗談である。

「姫様、お戯れはそれぐらいに——うっ！」

「——きやあっ！」

「姫様——！」

その時、突然馬車が急停止した。少女を諫めようとした秘書官の女性性は強かに馬車の壁に後頭部を打ち付け、悶絶する。一方で馬車が急停止した事による慣性で前のめりになって倒れそうになった姫君をエリックが咄嗟に受け止める。

一体何事か、そう文官の男が叫ぶよりも早く、馬車の扉が勢いよく開け放たれた。

「大変です！ ドラゴンが襲って来ました！」

「ドラゴンだと!? バカな、ありえん！ 彼等は縄張りを侵さない限り襲って来ないはずだぞ!？」

「そんな、どうして——!？」

少女達の乗る馬車の御者を務めていた兵士からもたらされた急報に驚愕する一同。

様子を確認する為に馬車を飛び出した一同の目に飛び込んで来たのは、唸り声をあげながら狂ったように暴れ回るドラゴンの姿と、暴れ回るドラゴンの攻撃を必死に受け流す兵士達の姿だった。

護衛用の馬車に乗っていた兵士は御者を含めて5人。それが4台の為、合計20名。その20名の兵士達が全員でドラゴンと戦っている

た。だが、勝てる見込みはほぼ皆無と言っても過言ではない。何故ならドラゴンの鱗を貫きダメージを与えられる程の強者がアルキード王国には極一部しか居ないからだ。

「エリック、ピーター、彼等を助けて！」

「いえ、それは——！」

少女の近衛騎士として研鑽を積んできた精鋭であるエリックと、今回は馬車の御者を務めていたピーター。彼等こそ、アルキード王国においてドラゴンにダメージを与えられる数少ない人物。彼等の強さについて、あばれザルを1対1でなら倒せるという言葉。その例えに含まれる語弊を修正しておこう。

彼等は、あばれザルを1対1でなら無傷で倒せる。彼等アルキード王国の王家直属の近衛騎士達はカール王国の騎士達との合同訓練でも互角に渡り合う事が出来る貴重な人材だ。

彼等を動かせば確かにドラゴンを倒すまでは行かずとも撃退する事は可能だろう。しかし——

「何故です？ 彼等を見捨てるというのですか!？」

「この状況だからこそです！ 貴女をお護りする。それこそが我等近衛騎士の使命なのです！」

「彼等とて防御に徹すれば簡単にはやられません！ その間に我々はこの場を離脱すべきです！」

王族を守護する事こそが近衛騎士の本懐であると言わんばかりに少女の願いを聞き入れないエリックとピーター。それは、人として間違っているのかもしれないが、彼女を生き残らせる事だけを考えれば最善の判断と言ってもいいのかもしれない。

しかし、彼女はかのソアラ王女の妹なのだ。

「——だったら、私もドラゴンと戦うわ！ そうすれば貴方達もドラゴンから私を護る為に戦うしかないでしょう？」

「な——っ！」

「貴女という人は……本当によく似ておいでですよソアラ様に……！」

——周りの者を守る為に自らの身を差し出す。

ソアラ
人の事を言えないぐらいに心優しい妹君の啖呵に嫌そうな目をしながらも口元が綻んでしまうエリックとピーター。

彼等も心を決めたのか、2人が剣の柄に手を掛けた、その時。

「さあ、行きましよう！」

「——いや、その必要は無い」

「————ツ!?」

場の空気が底冷えするような悍ましい声がある。その場を支配する。突然の出来事に身を寄せ合う5人。その様子を嘲笑うかのように、馬車の影から赤黒い影が現れた。

「何故ならお前達はここで死ぬからだ……ハドラー様をナメているとしか思えない宣言を出したアルキード王国の諸君よ……！」

凍れる時間ときの秘法から解き放たれたハドラーは力を蓄える為に地底魔城に撤退したが、自らが凍っている間にアルキード王国にて出された“共栄共存の宣言”に激怒して差し向けた自らの影。

——魔王の影。その禍々しさはドラゴンをも凶暴化させ、未だ魔王復活を知らぬソアラ王女の妹君達を亡き者にしようとしていた……。

第3話 初陣

勇者アバンの活躍によって仮初の平和が訪れてから1年ちよつとが過ぎた。原作通りならそろそろ2人が復活して、またモンスター達が凶暴化し始めるハズだ。そうなったら1年足らずで地底魔城での決戦が始まってしまふ。何とかそれまでにはパプニカ王国に行けるようになっておきたい所だ。

俺達は王都の門番さん達に付き合ってもらって修業を続けていた。そうすると時々城から馬車が出る時がある。どうしたのかと訊くと、何でも魔王が封印されたから魔王が暴れていた間に荒れてしまった町や村の復興が必要な為、視察に出掛けるんだそうだ。

そこで「いや別にまだ魔王居なくなつてないけど？」等と言う訳には行かない。どうも現在の平和が、勇者アバンがその命と引き換えに魔王ハドラーを封印した美談みたいになっているからだ。

——「凍れる時間ときの秘法」。原作ではサラツと力量レベルが足りないから1年ちよつとで解けてしまった、みたいな事しか説明されていなかったように思うが、あの説明自体がそもそも最終決戦の時の話だ。だからあの説明自体が現在いまから見た未来の視点で説明をしてる事になる。

……何だか分かりにくい言い方だが、要するにあの説明は最終決戦の時点での視点だから出来る説明であつて、凍れる時間ときの秘法が解けた後で判つた事を含めて説明していったんだ。

つまり、今の時点ではいつ秘法が解けるのか、それとも次の皆既日食まで解けないのかさえも分からなかったんだろう。それを俺はたまたま原作知識で1年ちよつとで解けると知っていただけであつて、……そうか、だからあんな宣言が出されたのか。

モンスター達が大人しくなつてしばらくして、勇者アバンが魔王ハドラーを封印したという話がこちらにも伝え聞こえて来た辺りで、ソアラ女王様の声明で「共栄共存の宣言」つてのが出されたんだ。

ざっくりと言えばモンスター達もこの世界の生態系の一部だから必要以上の殺生はせずに仲良く暮らして行きましようね、という宣言

だ。

その宣言自体を悪く言うつもりは無い。というかドラクエが好きで原作なりアニメなりでデルムリン島の様子を見た事があれば誰だってああいう環境を楽園だとか理想郷という言葉で表現したくなるだろう。だからある意味それを目指すようなソアラ王女様の宣言はとても応援したくなるぐらい喜ばしい訳だが……。

正直時期が悪いとしか言いようが無い。もうそれほど日を置かずにまたモンスター達が凶暴化してしまつて宣言は台無しになるだろう。それに、そんな宣言を魔王ハドラーが聞いたらどう思うだろうか？ 侵略されてる側の癖に仲良くしましよなんていきなり言われていい気分になるだろうか？ 一介の武人になる前の魔王ハドラーなら激怒してそんな宣言を出した奴に意趣返しをしてもおかしくないんじゃないのか？

というか何だかそんな宣言が出されていた事自体に凄く違和感がある。そもそも、バランスを魔王軍の生き残り扱いするような国が、モンスターとの融和政策みたいな事を打ち出している時点でおかしいんじゃないか？

……まさか、原作では語られていない、この宣言が覆るような致命的な事件が起こるつてののか？ だがその場合、どんな手段が考えられる？ ダイが生まれるのはハドラーを倒した3年後ぐらいだから、原作のこの時点でソアラ王女が死ぬハズは無い。ただ死なないだけで、ソアラ王女が死ぬ寸前までヤバイ状況に陥つて、どうにか助かったけどやつぱりモンスターは、魔王軍は危険だつてなるのか……？ それとも他に事件が起こる……？

「ねえおじさん、さっきの馬車に兵隊さんがいっぱい乗ってたけど、町や村を見に行くだけじゃないの？」

「……?!」

「ああ、あの馬車には王族の方が乗つててな。ソアラ王女様の妹君の……つて、どうしたアル坊、顔が真っ青だぞ!」

「悪い、ちよつと森で特訓してくる！ アリス、シーザー、モーゼス、付き合つてくれ！」

「う、うん、待ってよお兄ちゃん！」

「何スカアル兄、急に慌てて……」

「そうじゃぞアルよ、一体どうしたというんじゃ」

「悪いが上手く説明出来ないんだ！ とにかく俺との走り込みに付き合ってくれ！」

——くそつ、何だか物凄く嫌な予感がする！

大体なんで今まで気付かなかったんだ！ 原作にソアラ王女の妹なんて居ない。作劇上必要が無くて描写されなかつただけなのかもしれない。でもさっきの妄想が頭から離れない。まさか、凍れる時間ときの秘法が解けた時に、魔王ハドラーの報復でソアラ王女の妹さんが殺されてしまって、それであんなに魔王軍の残党が居たりしないかを過剰に警戒してたんじゃないか……つて——

「ああくそつ、こんな事なら落ちたら怖いからつて後回しにせず先にトベルーラの練習しとけば良かった！」

「お兄ちゃん！ なんでそんなに慌てるのか分からないけど、ピオラ使おうか？」

「ああそうかそれすら思い付かないとかヤバいな俺!? アリス、頼む！」

「うん！ 速度倍加呪文——！」

「——っ！ アリス、ありがとう！ みんな悪い、俺は先に行く！ そのまま街道を馬車に追い付くまで進んでくれ！」

頼む、俺のただの痛い妄想で済んでくれ……！

「さあどうした？ アルキード王国の近衛騎士とやらは私にキズを付ける事も出来んのか？」

「くそつ、斬つてもすり抜ける……！」

「おのれ、奴から攻撃してくる時は実体化しているのは判っているというのに……！」

魔王の影にエリックとピーターが斬り掛かるが、魔王の影はただの影の状態と実体化を使い分けられるようで攻撃がすり抜けてしまい全く当たらない。

魔王の影の方から攻撃してくる時であれば当然実体化している。その事にはエリック達も気がついていない。つまり、魔王の影が攻撃してくる瞬間。その攻撃の手は実体化しているのだからそこを斬ればいい。

それはエリックとピーターの2人掛かりであれば決して不可能ではないのだが――

「どうした？ 諦めたら大切な者が死ぬぞ？ 絶命呪文――おつと！」

「させるかあつ！ 絶対に姫様をお護りするのだ！」

そんな弱点の事は百も承知である魔王の影がそんな単純な行動を採るはずも無く。絶対に攻撃を受けない自信がある時しか物理攻撃はせず、攻撃の瞬間を狙われている時はザキで直接ソアラ王女の妹君を攻撃。

だがそこはエリックかピーターが魔王の影に攻撃を仕掛ける事によって呪文攻撃を中断させる事で対処し、何とか誰もやられる事無く戦えている。

「ゴメンなさい！ 私に戦う力さえあれば、こんな事には……！」

「何を仰いますか！ 貴女の守備力増加呪文が無ければ今頃我々は力尽きております！」

「ふん、攻撃呪文の1つでも覚えていれば私に攻撃を当てられたかもしれんのかなあっ！」

アルキード王国周辺には魔王の影のように物理攻撃が極端に効き辛いモンスターは居ない。その為、補助系魔法に適性のあった者は兵士達の戦力底上げの為に優先的にそちらの訓練に集中し、攻撃呪文の練習は後回しになってしまっていた。攻撃呪文にしか適性の無かつた者については、魔法力が尽きたら役に立たないお荷物としてあまり重宝されていないのがアルキード王国での実情である。

しかしそうして補助系魔法に注力している事は一定の結果を出しており、アルキード王国の兵士達は練度という意味ではカール王国やオーザム王国には及ばないにも関わらず死亡率が世界各国の中でも最も低い為、アルキード王国は補助系魔法大国と呼ばれる事もあったりするとかしないとか。

——それはともかく。今回の戦いに於いては国の方針が完全に裏目に出てしまっている形だ。勿論、ドラゴンと戦っている兵士達は未だ犠牲者ゼロなので無意味ではないが、魔王の影との戦いではその国家方針が完全に裏目に出ってしまったている。

そして遂に、限界の時は訪れる——

「うわあああああ!!！」

「くっ……ダメ、もう魔法力が……！」

——この場の兵士達の防御力を底上げしていたソアラ王女の妹君の魔法力が尽きようとしていた。

防御力が落ちてしまった事により、ドラゴンの攻撃を捌き切れなくなってしまう兵士達は次第に力尽きて行く。更に——

「ふんっ！」

「ぐあああああ!!！」

「エリック！ ピーター！」

防御力が落ちた瞬間を狙われてしまい、近衛騎士の2人も魔王の影

の攻撃を捌き切れずに吹き飛ばされてしまう。悠然と近付いて来る魔王の影とソアラ王女の妹君はこの時初めて、騎士を間に挟まずに対峙する。

そこでソアラ王女の妹君は護身用に持っていたナイフを抜いて構える。

「何!?! 貴様、それは……!」

「神官様の祝福を受けたこれなら! やあああああ!」

「小娘の技量では私にはかすりもせんわ!」

「きやあつ!?! あ、ぐ……!」

ソアラ王女の妹君が持っていたのは聖なるナイフ。確かにそれなら魔王の影に当てる事が出来ればダメージを与えられたかもしれない。だが、残念ながら使い手の技量が足りなかった。

魔王の影は左手で聖なるナイフを森の奥まで弾き飛ばし、更に右手でソアラ王女の妹君を殴り飛ばす。彼女は砲弾のように吹き飛び、森の木の幹に叩きつけられる。

「終わりだ、姫君よ。恨むなら我々と仲良く暮らしましょう等とふざけた事を抜かした貴様の姉を恨むのだな」

「……………ない」

「……………何?」

「姉様はふざけてなんかいない! 勇者様が魔王を封印し、モンスター達が昔のように大人しくなったと思ったからこそ出した宣言だったのに、それを貴方達が……!」

「…………フ、ハハハハハハッ! これは滑稽だ! 我々がここに居る時点で気付かんのか! その封印とやらはとづくに解けているぞ!

つまり、貴様等の勇者は無駄死にだったという事だ!」

「あ、ああ、そんな……!?!」

ソアラ王女の妹君の言葉を聞いて哄笑する魔王の影。そして聞かされた衝撃的な言葉に青褪める彼女の表情を見て、魔王の影の厭らしい笑みが更に深まる。

絶望に染まった少女にトドメを刺さんと魔王の影がその腕を伸ばしながら振り上げ——そして。

「フハハハハハッ！ いいぞ、その顔が見たかったのだ！ その絶望のままに……死ねえいつ！」

「——っ!？」

「——適切な事を抜かすな、三下」

「——ッ！ くっ、誰だ!？」

致命の一撃が振り下ろされようかというその瞬間。先程森の奥まで弾き飛ばされた聖なるナイフが寸分変わらず魔王の影の眉間目掛けて飛来し、魔王の影は飛び退かざるを得ず、少女の前から大きく遠ざかった。

そしてそこに、速度倍加^オ呪文^ラによる赤い光の軌跡を残しながら1人の少年が魔王の影と少女の間に割って入った。

その少年は僅かに青みがかった黒髪に、青い瞳が印象的な小柄な少年だった。いや、まだ成長途上の身体であろうから小柄という表現は彼に失礼だろうが。

その出で立ちアルキード王国の一般的な国民の服装と何ら変わりの無い普通の服装をしていたが、背中に剣を背負っているという点だけが一般的な国民と比べて明らかに異質だった。

その少年は静かに背中の剣を抜き放ち、そのまま正眼に構える。

「誰かと思えばただのガキじゃないか！ ガキに三下呼ばわりされる筋合は無いわ！」

「勇者が死んだ等と適切な事を抜かすお前なんか、三下で十分だ」

「貴方のその剣、まさか——」

魔王の影と少年が言い合っている中、少女は少年の剣の正体に気付く。十字架をモチーフにして製作されたその剣は——

「貴様、何故アバンの生存を知っている……!？」

「それに答える義理は無い。喰らえ——!」

「——ッ!?! ギャああああ！ け、剣から魔法だと!? 何だその剣は!?!」

「それに答える義理も無い。せやあつ!」

「ちいつ、小賢しい！ だが当たらんわ!」

少年の剣先から突如黄金色の光線が放たれ、完全に不意を突かれた

魔王の影の右肩を灼く。驚愕する魔王の影だったが、少年からの追撃の斬撃はしつかりと回避してみせる。

「どうして貴方が破邪の剣を……？」

「今まで使わずに貯めてた小遣いを全部使って買った」

「え？ あ、いえ、そうではなく——」

——破邪の剣。本家のドラゴンクエストシリーズでは、道具として使う事で閃熱呪文^{キラ}を何発でも放つ事が出来る剣だ。そんな便利な剣にも関わらず、アルキード王国の兵士達には配備されていない。

アルキード王国で標準装備されているのは鋼鉄の剣であり、重要な立場である王族の近衛騎士であるエリック達ですら破邪の剣が配備されていないのには理由がいくつかある。

まず1つ目が、製造コストが鋼鉄の剣の倍以上掛かってしまう上に製造可能な本数に限りがある点。閃熱呪文^{キラ}を封入する宝玉を造るコストが非常に高い上に製造に時間が掛かってしまい、配備に時間が掛かってしまう。

続いて2つ目の理由が、鞘が無く常に抜き身の状態になってしまう点。破邪の剣は十字架を模した独特の形状をしており、それに合わせられる鞘が存在しない為、帯剣しているとひよんな事から護衛対象を傷付けてしまう可能性がある為、配備が見送られているのが現状だ。

そして最後に、再使用可能時間^{リキャストタイム}が長い点だ。何もせずとも時間を掛ければ再使用可能なのは非常に画期的ではあるのだが、何と1日1回しか撃つ事が出来ない。

これら3つの理由から考慮された結果として、破邪の剣はただコストの高いハズレ武器として見放されてしまっている、というのがアルキード王国での現状だった。

にも関わらず、アルバートが破邪の剣を選んだ理由。それは——

「何で破邪の剣を選んだかって事なら、俺とこの剣は相性が良いんですよ。だってこうすれば——閃熱呪文^{キラ}！」

「えっ？ 閃熱呪文^{キラ}が破邪の剣の宝玉に吸い込まれて……！」

「これでまた破邪の剣から閃熱呪文^{キラ}が撃てるようになるんです。まあ、自分の魔法力を消費して補充してるので意味無いと思われるかも

しませんが、いざという時に咄嗟に撃てるので意外と便利なんですよ」

アルバートが破邪の剣の再使用可能時間の問題に1つの答えを出せたのは、ひとえに原作知識で魔弾銃を知っていたからというのが大きい。

実の所最初はただ勢いで買っただけだったが、買ってから1日1回しか使えない事を知り、そもそもその仕組みとして宝玉に閃熱呪文が封じられているのを見て、魔弾銃の弾に呪文を込めると同じように破邪の剣の宝玉にも閃熱呪文を込め直す事が出来ないか試してみたら出来た、というのが経緯だったりする。

それともう1つ。アルバートは少女の質問を意図的に逸らしている。

少女から問われた何故破邪の剣を持っているのかという問い。それはどうやって手に入れたかではなく、少女とほとんど歳の変わらないような少年が何故剣を持っているのかという意味で言われているという事にはアルバートも気付いている。

ただそれは言葉で説得するには今の自分の外見では無理だと判断し、これから行動で示すつもりなので話を逸らそうとしているのであった。

「生意気なクソガキが！ 死ねえっ！ 絶命呪文——！」

「させるか！ 撃ち抜け——！」

「同じ手は喰わんぞ！ ふんっ！」

「うおっ!? ……あつぶな、何とか防げたけど今の俺じやまだ斬れないか」

魔王の影が呪文を唱えようとした所をアルバートが再度閃熱呪文で撃ち抜こうとするが、それは魔王の影の誘いだった。

破邪の剣から放たれた閃熱呪文を魔王の影はヒラリとかわしながら両手をムチのようにしならせて襲い掛かる。襲い来るそれをアルバートは咄嗟に破邪の剣で受け止める事に成功するが、実体化した影を剣で受けても斬れなかった事に落胆するのだった。

「ふん、ガキの分際で魔法が使える事には驚かされたが、その程度の

力量^{レベル}ではこの私を倒す事は出来ん！」

「……………」

「そして貴様が私を倒せなければアルキード王国の兵士達はドラゴンに皆殺しにされる！ そうなれば後は貴様だけだ！」

「……………」

「どうだ、絶望のあまり逃げ出したくなってきたらどう？ そうだ！ 今からでも姫を見捨てて逃げるといふなら見逃してやってもいいぞ？」

「そうです！ 王族だからといって見ず知らずの私なんかの為に命を捨てないで下さい！ その歳でそれだけの才能を持っている貴方なら、きつとこれからもっと強くなれます！ ですから今は生きて、そしていつかハドラーを倒して下さい……………」

「…………フハハハハハハハ！ これは傑作だ！ ほらガキめ、姫様もこう仰っているんだ、今からでも泣いて命乞いをすれば見逃してやってもいいぞ!?!」

思わぬ加勢があつたが、形勢逆転とまでは行かなかつた事を察してか、少女からも今は逃げるように言われてしまうアルバート。

それを聞いた魔王の影は嗤い、見逃してやろうとアルバートを嘲笑する。

ずっと黙り込んでいたアルバートの答えは――

「どうした？ 恐怖と焦りのあまり言葉も出んか？」

「…………いやな、逆に訊きたいんだが……………いつから俺が1人で来たかと錯覚していた？」

「何…………？ うおおおおつ!?!」

怪訝な様子を見せる魔王の影に向かって、森の奥からバランスボールぐらいの大ききの火球が飛んで来る。

その奇襲に驚いた魔王の影はその場から飛び退くが、そこへアルバートが狙いすましたように魔法を放つ。

「そこだ！ 閃熱呪文^ギ――!」

「ぐああああつ！ このつ、ガキがああああつ！」

「させないつ！ 守備力増加呪文^カ――!」

「サンキュアリス！ はああああっ！」

アルバートの掌から放たれた熱線で撃ち抜かれながらも、魔王の影はその影を伸ばしてムチのように振り回して反撃してくる。

しかしそこへ、合流したアリスがアルバートの守備力を底上げし、アルバートはムチのように伸びた影で打たれても吹き飛ばなくなる。そうなったアルバートは避けきれなかった攻撃を堪えながらもそのまま魔王の影に接近し、破邪の剣で袈裟懸けに斬り裂いた。

「ぎゃああああっ！ ぐっ、おのれ、こうなったら兵士共を先に皆殺しにしてくれるっ！」

「チツ、あいつの方が速い！ アリス、練習してたアレをやるぞ！」

「分かった！ お兄ちゃん、ちよつと待ってて！」

「ああ。その間に俺は閃熱呪文を補充して、と」

咄嗟に避けたのか、破邪の剣の攻撃は浅く、魔王の影の致命傷には到らなかった。火炎呪文からの閃熱呪文、守備力増加呪文からの攻撃と、2人の連携を厄介だと感じた魔王の影はドラゴンとの合流を試みる。

しかしそこには――

「氷結呪文っスよ——つと！」

「せああああ……ドラゴン斬り！」

「ギヤアアアアアア——！」

シーザーが氷結呪文を放ってドラゴンの動きを止めた所を、モーゼスが剣を裂帛の気合を込めて振り下ろした。完全に足を止めて使っている様子から、まだ動かない相手にしか使えないようだが、それはまさしく闘気の輝きを放っていた。

その威力は凄まじく、使っているのは兵士達と同じ鋼鉄の剣にも関わらずドラゴンの鱗を容易く斬り裂き深手を負わせてみせる。

「バカなッ!? こんなガキ共が氷結呪文だけでなく闘気まで使っただど!？」

表情こそほとんど読めないものの、明らかに狼狽した声色になる魔王の影。少年の仲間が増えた事で明らかに形勢が不利になった事を悟ったのか、今からでも撤退する算段を整えようとする。

その時、魔王の影はようやく周囲の変化に気付く。周囲がいつの間にか暗くなっていたのだ。その事に気付いた魔王の影は、暗くなった原因を察してか空を見上げる。そこには暗雲が立ち込めていた。

「何だ、あの黒い雲は……ま、まさか——ッ!?」

「喰らえ三下! 電撃呪文——!!」

「ウツ、ウオオオオオオツ!」

耳を劈くような轟音と直視出来ないような眩い閃光と共に稲妻が魔王の影とドラゴンを灼き尽くさんとする。

モーゼスの一撃で深手を負っていたドラゴンは、受けた雷撃が傷口からも侵入して体内も感電して灼かれ、絶命する。

一方の魔王の影はというと、雷撃に灼かれはしたものの咄嗟にドラゴンの影に潜る事でダメージを半減させて生き残っていた。

「はあつ、はあつ、……まさかドラゴンがやられるとは……くそつ、こくなったら撤退するしかない!」

「何を言つとるんじや、逃がす訳が無からう。はっ!」

「そうっすよ、逃がさないっす——氷結呪文!」

「おっと、ダメージこそ負ったが回避に専念すれば貴様等の攻撃なんぞ当たらんわ!」

撤退しようとする魔王の影を、すぐ側に居たモーゼスの斬撃とシーザーの呪文が追撃するが、モーゼスの攻撃は躲され、シーザーの氷結呪文はそもそも効果が薄いのか効いていない様子。

そのまま森の奥へ逃げ込まれるかと思われた瞬間。紺色の光が魔王の影を包み込んだ。

「逃がさないんだから! 速度鈍化呪文——!」

「ぐっ!? こ、こんなもの〜!!」

魔王の影を包み込んだのは、アリスが放った速度鈍化呪文の光だった。

ところが魔王の影はその呪文に対する耐性を持っていたのか、呪文が掛かり切る前に力尽くで光を振り払おうとする。しかしそこへ——

「速度鈍化呪文!!」

「おっ、……おくのくれ……!!」

「これが私に残った全魔力です！ 誰かトドメを！」

「姫様、お任せ下さい。……はあああつ！」

更に王女様の速度鈍化呪文が上乘せされ、ほとんど動けなくなる魔王の影。その前に破邪の剣を正眼に構えるアルバート。

アルバートは1つ深呼吸をすると、気合を発する。すると、先程のモーゼスと同じ闘気の輝きが剣を包み込み、アルバートはそのまま剣を真っ直ぐ振り上げ、垂直に振り下ろす。更にその瞬間、アルバートは破邪の剣に封じられた閃熱呪文を解き放つ——！

「トドメだ！ 閃光斬り——!!」

「ア、アア……ハド……ラー……様……！」

アルバートが放った魔法剣もどきの一撃がトドメとなり、アルキード王国を襲ったモンスター達の襲撃は終息するのであった……。

第4話 太陽と月の姫君達

魔王の影を倒した俺達は、どうにかソアラ王女の妹君を救う事が出来た。

いや、本つつつ当くくくに危なかった。

状況を見るに、俺達が介入しなかったら本当にヤバかったように思う。というか俺が3人を巻き込まずに1人で修行して俺だけで介入してたらいきなり詰んでたんじゃなからうか？ ちよつと1人では勝てた気がしない。

逆に言えばそのぐらい強力な死亡フラグを折る事に成功したんだ、これで balan 受け入れフラグが立ってくれる事を祈る。

それで今、俺は何をしているかというところ——

「ああ、城内で噂になってたのは貴方達の事だったんですね！ この度は本当にありがとうございます」

「回復呪文——……いえいえ、私達なんてまだまだですし、この人間ならこの国の為に戦うのは当然の事です」

「おい貴様、姫様が話しておられるのだぞ、話を聴く姿勢にならないか！」

「回復呪文——……申し訳ありません。自分は未熟者故、相対しないと治療が出来なくて。どうかお赦し願えませんか？」

その、ソアラ王女の妹君から直接お礼を言われている所である。しかも、兵士達に回復呪文を掛ける事に集中して、彼女の話にはチラッと目を合わせるだけの態度で。

文官だと思われるお爺さんに怒られてしまうが、俺はまだ他事をしながら治療するような芸当は出来ないのでもうしようもない。人命優先で治療に集中してるんだから、きつと赦してくれる……よね？ それとも一瞬手を止めた方がいいかしら？

「いえ、私は構いません。むしろ兵達の治療までして下さり感謝しています」

「……すまぬ少年。今は非常時であった。……姫様、兵達の最低限の治療が終わり次第、報告の為に1度城に戻るべきだと思います」

「そうね、他のモンスターが襲ってこないとも限りません。今は早く皆を集めてこの場を撤退しましょう」

「回復呪文——……無礼をお赦し頂き、感謝致します。申し訳ありません、私の魔法力では治療はここまでです。まだ急ぎの治療が必要な人が居るなら妹をこちらに呼びますが……」

俺の言葉を聞いて文官の爺さんが確認を取るが、どうやら緊急性の高い怪我人は居ないみたいだ。

それでは俺達はこれで、とその場を立ち去ろうとしたのだが、姫様に呼び止められた。

「待って下さい。えっと、貴方の名前を聞かせてもらえませんか？」

さつき姫様は「城内で噂になってる」と言っていたが、ほぼ毎日のように門番の兵士さん達に絡んで暇な時に訓練してる変わり者の少女少女達が居る、と言った程度の噂なんだろう。後は、使ってる魔法とかから、かなり沢山の魔法を契約していった子達が居る、ぐらいの噂にはなっていたのかもしれない。

だけどもあ、流石に名前までは噂になってなかったみたいだ。

「……アルバートです。皆からはアルと呼ばれています。あちらで治療をしているのが妹のアリスで、向こうでドラゴンの解体を手伝っているのがモーゼスとシーザーです」

「アルバート、さん……ええ、覚えました。本当にありがとうございます」

「畏まりました、……えくと……」

俺はここで返事に窮してしまった。相手をどう呼ぶべきか、だ。

単に「姫様」呼びでもいいと思うんだが、少なくとも一緒に強敵と戦った仲としては名前が「●●様」呼びぐらいの方がいい気がしたんだ、けれども……。

俺、実はこの娘の名前を知らないんだ。宿屋でもソアラ王女の話題ばかりでこの娘の話題が出てた記憶が全く無い……ヤバイ、どうしよう……。

「あ……私としたことがすみません、申し遅れましたわ。私はアルキード王国第2王女、シンシア。ですが私はソアラお姉様のおまけの

ようなもの。どうか気軽にシンシアとお呼び下さいな」

——と思っていたら、姫様はハツとしたような表情を見せた後、思わず見惚れてしまうような笑顔で優雅なカーテシーを披露しながら名乗ってくれた。

「……畏まりました、シンシア様。また後日お会いするのを楽しみにしていますね」

「私の事はシンシアとお呼び下さい」

「え？ いや、私はただの宿屋の息子で——」

「私の事はシンシアと」

「いやいや、平民が王族を呼び捨てにする訳には——」

「シンシアと」

「いやいやいや、そんな訳には——」

何だかシンシア姫様の圧が凄い。

いやまあ確かに本家ドラクエやダイの原作でもそう滅茶苦茶堅い敬語では喋ってなかったような気がするけども。

でもさつき文官のお爺さんに礼儀作法的な意味で怒られたし、呼び捨てはマズイでしょうよ、ねえ？

と思って文官のお爺さんに視線を向けてみたものの、横で姫様が「呼んで頂けないなら今後貴方の事をずっとアルバート様と呼びます」とか何とか言い出した所為か、文官のお爺さんも何だか諦めたようにうなだれながら首を横に振ってしまった。

うくん……いいんだな？ 後日城に呼ばれた時にどうなっても知らんぞ？

「——分かったよ、シンシア。今度は城で会おう」

「……はいっ！」

あら可愛い満開の笑顔だこと。

……って、しまったああああっ！ シンシア王女を呼び捨てにしたら同時に口調もタメ口になっちゃったああああっ！！ 本人は全く気にしてなさそうだけど流石にタメ口はマズイ、逃げねば！

とまあ、そんな風に俺達はその場を後にするのであった。だ、大丈

夫だよね？ 曲がりなりにもやんごとなき身分の方をお救いした訳だし、不敬罪ぐらいはどうかご容赦頂けますかねえ？

そんなこんなで後日。

俺達はアルキード城の謁見の間で跪いていた。

「此度は我が娘、シンシアを魔王の影の魔の手から救ってくれた事、本当に感謝している。真に大義であった」

「いえ、我々はこの国の民として当然の事をしたまで。それを王様が御自ら礼を述べて下さるなど、恐悦至極にございます」

「うむ。……そなた、アルバート、と言ったか。差し当たってお前達に褒美を取らせたいと思うのだが、何か望みがあれば聞こう」

うおおおお王様から直に礼を言われるとかやべええええ！ 何かそれっぽく適当に知ってる敬語を並べ立てたけど正しいのかどうか全く自信が無えええええ！

しかもどうしよう。城に呼び出される時に使者の人から「褒美が出る予定なので考えておきなさい」って言われてたのにまだ決められて

ない。

アリスは「お兄ちゃんが欲しい物でいいよ」って言ってくれちゃうし、シーザーは「アル兄に任せるっス」とか言うし、モーゼスなんて何も言わねえし、いや俺が言い出しっぺだから俺がリーダー的立場で決めていいって意味なのは解るんだけども！

「はい。……それなんです、実は……」

「どうした？」

「いえ、その……私の望みは大きく3つ程あるのですが、まだ1つに決められてなくてですね……」

ああ恥ずかしい。ほら、大臣っぽい人達は何かヒソヒソ話し始めたし、シンシア姫様はびくりしたような顔してるし、その横にいらっしやるソアラ王女は何故か興味津々な表情でこっち見てるし。

早よ決めなきや、と必死に考えていたら、

「ならば、その望みを3つ共申してみよ。そなたの望みを聞き、こちらで決めようではないか」

「だなんて王様に言わせてしまったではありませんか。」

ああでも、どのぐらいの褒美だと釣り合いが取れるのかさっぱり分からんし、全部言ってみるというのも案外理に適ってるのかもしれない。

ならいつそ、本当に3つ共言ってみるか。

「畏まりました。……えく……まず1つ目は、私達の装備が欲しいのです。私達は着の身着のまま、武器だけ小遣いを貯めて買っただけという状態です。私達の目標は魔王を倒すとまでは言わないまでも、この国を、家族を守るぐらいの力を付ける事。その為に、どうか」
「我が国の兵達以上の働きをしてくれたそなた達がごく普通の普段着というのもおかしな話だな。良かろう、前向きに検討する事を約束しよう」

「ありがとうございます。2つ目は、今以上に強くなる為に他の国にも赴き、様々な技術や知識を学びたいと考えています。なので、その旅をする為の援助をお願いしたいのです」

「ふむ、成程。既にそなた達は我が国の精鋭と同等に近い強さだと聞

くが、それ以上を目指すのであれば世界を旅して力を付けるのは道理であろうな。……して、最後は？」

「はい、強いて言えば実は3つ目が1番の望みなのですが……シンシア王女様とソアラ王女様を鍛えて頂きたいのです」

俺の3つ目の望みを聞いて、城内が騒然となる。

そりやそうだろう。皆さんが何を訳の分からん事を言つとるんだという顔をしていらっしやる。……いや、シンシア王女は不満そうな顔をしているし、ソアラ王女は何故かわくわくしてそうな表情をしているな。

それにしても、あれから宿のお客さんや門番のおっちゃん達に王女様達の為ひととなり人を訊いてみたりしたけど、見事なまでに『似た者姉妹』つて感じだったのに何で反応が違うんだ……？ あ、ひよつとして……いや、んなアホな、まさかこんな公式の場でもシンシア王女を呼び捨てしろと？ 確かに自分の今の年齢（13歳）を考えたら敬語を話さなくてももしかしたら許されるかもしれんけど、はつきりとは覚えてないが生前の俺は社会人だった気がするのでおいそれと敬語を止めるのは恐れ多いんだよなあ……。

それはともかくとして、理由を話さなくては。

「……今回のような件が1度きりとは限りません。遅かれ早かれ私達は世界を旅する為にこの国を離れます。その時に自らの身をご自身で守れるようになって頂きたいのです。これは結果論ですが、まだ魔王の脅威が完全に無くなった訳でもないのにソアラ王女様が出してしまつた『例の宣言』は、侵略している魔物達からすればナメられているように感じるかもしれません。ですので、王女様達には自衛の力を付けて頂きたい」

「……ふっ、はっはっはっはっはっ！ 何を言い出すかと思えば、まさか最大の望みが我が娘達の今後の心配とはな……分かつた。そなたの望み、その全てを最大限善処する事を約束しよう」

「……ありがとうございます……！」

ああああ良かったああああ！ ダメ元でも言ってみて本当に良かったあああ！ 王族に向かつて「あんたら弱いから修行しろ

よ」とか何様だこいつつて思われたらどうしようかと思っただけいい方に受け止めてくれて本当に良かったああ〜！

……実は王様に言った事は嘘という訳ではないが、本意でもない。勿論、今回のような事がまた起きた時にもし俺達が居なかつたら今度こそシンシア王女が死んでしまう。そうすると結局魔族憎しの感情が増幅されてしまい、バランスを排斥する動きが起きやすくなってしまふ。だからシンシア王女にはある程度強くなって欲しい……というのもあるが、真の狙いはソアラ王女にある。

ソアラ王女がもし強ければ。彼女がある程度自衛出来る實力を持つていれば色々と流れが変わるんじゃないだろうか。例えば駆け落ちした際に捕まらなくなるかもしれないし、もしかしたらバランスを処刑しようとする時の火炎呪文多分メラミ（まさかいくらなんでも火炎呪文メラゾーマじゃないだろう）を代わりに受け止めても死なずに耐えられるようになるかもしれない。

例えばもし全く同じイベントが起きたとしても、ソアラ王女が死なずに耐えてくれればバランスも流星に国を滅ぼす程キレたりはしないだろうし。勿論俺達が当日その場にいれば乱入してでも処刑イベントそのものを食い止めるつもりだが、別に準備し過ぎても損は無いだろう。

そもそも現実的な問題として、あの処刑イベントが起きる日付が分からないのだ。最悪の場合、何らかの事情で俺達が居合わせる事が出来ない時に事件が起きて、突然国ごと吹っ飛ばされるかもしれないのである。

となれば、自分が居合わせる事が出来ない場合でもイベントを防げるように手を尽くさなければならぬ訳で、「あんたら弱いから修行しろよ」が俺が思い付く限りの最善手になるのだった。

この場では「褒美は後日用意する故、本日はこれにて謁見を終了する」と言われ、俺達は城を後にした。

アルバート達が謁見の間を退出した後。

「——ソアラ、シンシアよ、彼等をどう思う？」

「そうね……とても良い子達だと思うわ。ただ、引つ掛かる点が全く無いという訳でもないけれど」

「言葉遣い……ですよね、お姉様？」

「ええ。聞けば彼は宿屋の息子らしいけど、それにしても畏まり過ぎている気がするわ」

「私は、実際に彼に助けられる事になった私だけではなくお姉様も鍛えるべきだと言っていた事にも違和感を感じました。確かに言っていた事は何も間違っていないのですが、まるでお姉様も危ない目に遭う事を確信しているかのようにも聞こえて……」

アルキード王は、2人の愛娘に問い掛けていた。

彼女達は昔から直感的に人の本質を見抜く事に長けており、以前から度々官僚達の不正や欺瞞を見抜いていた為、今回もし何かしら怪しい気配を感じたら対応を考えねばならないと思っていたのだが。

「……そういえば、彼等が2年前に突然鍛え始めたのって、夢でお告げを聞いたから、だったかしら」

「お姉様……もしかしたら、そのお告げで何か聞いているのかもしれない、と？」

「まあ、もしかしたら、だけどね？ 例えば、今回の事件で貴女は死ぬはずで、それが原因の1つになって遠からず私も死ぬ。だから2人共鍛えて、死なないように自衛の力を付けて欲しい……とか」

「そんな、まさか——！」

2人の話をバカバカしい、とも言い切れない。

現に今回の事件において、彼等の助力が無かったらシンシアの命も、同行していた兵士達の命も落としていた可能性が非常に高いのだ。

その事についてはシンシアからだけではなく近衛兵達エリックからも同様の報告を受けており、だからこそアルキード王は本当に感謝していた。

——王は、決断する。

「——お前達の話は分かった。ソアラ、シンシアよ、お前達は彼等と共に

にカール王国に向かうのだ。今回の一件で魔王ハドラーの脅威は去っていない事が判った以上、戦う力は必要である」

「分かったわ、お父様」

「アルバートさん達と修行……！ 分かりました、お父様」

アルキード王は、ソアラとシンシア、2人の王女をカール王国に留学させる事を決意した。

そこにアルバート達を王女達の護衛という形で雇って同行させる。護衛として装備品を支給し、アルバート達を最強と謳われるカール王国騎士団の訓練に参加させ、そこにソアラとシンシアも加えて鍛えるのだ。

全員が謁見の間を退出した後、アルキード王は1人ごちる。

「……後は、今回のような魔物への対策として、補助呪文だけではなく攻撃呪文の修得にも力を入れねばならん。その為には、パプニカにも使いを出さねば」

——シンシア王女が襲撃された事件。

本来の歴史では彼女の死をきっかけにアルキード王国は攻撃呪文の修得に躍起になる。その結果、これまでは剣で行っていた罪人の始末を数人掛かりによる攻撃呪文で行うようになるのである。

それは、シンシア王女が助かったとしてもアルキード王国にとっては大きな反省点となり、攻撃呪文、特にシンシア王女を襲った魔王の影の弱点である炎系呪文の習得に関しては何に力を入れていく事になる。

果たしてシンシア王女を救った事でアルキード王国の滅亡を防ぐ事に繋がるのか……その結果が出るのは未だ3年程先の話である……。